

わが身にも思い当たる<「としている」症候群>

加藤良一 令和5年2月26日

かつて、江國 滋^{えくにしげる}という文筆家がいた。演芸評論家として、初めて出版したのが『落語手帖』で、その後『落語美学』『落語無学』『絵本・落語風土記』と続けて執筆している。また、エッセイストでもあり、さらに俳句にもかなり通じていて、俳号を滋醉郎と称していた。江國さんの魅力は、なんといってもちまえの庶民気質と自由人としての闊達な目を活かした語り口である。ついでに、小説家、翻訳家、詩人の江國香織さんは娘さんである。

江國さんが平成元年(1989)に出版したエッセイ集『日本語ハッ当たり』のなかの、<「としている」症候群>という項目に目を通したとたん、ひやりとした。そう、筆者にも心当たりがあるからだ。江國さんは、つぎのように書いている。

ことばというものは伝染するもので、ひとたび感染すると、周囲の人間にウイルスをまき散らして、ネズミ山算式に、患者がふえていくこと、エイズと同様である。話しことばだけに限らず、文章表現についてもその病理は妥当する。

いつごろからだったろうか、実に不自然かつ感じの悪い語法が目につきはじめて。なんだこれはと思っているうちに、たちまち蔓延していまに及んでいる病的表現がある。発生源ならびに汚染地区は、主として新聞各紙である。

新聞の場合、文章などというものは情報伝達の手段にすぎないので、といつてしまえばそれまでの話だけれど、一紙につき何百万人という人間が、毎日、それも朝夕二回、ほとんど習慣的に目を通してするのが新聞の文章であって、そういう読まれ方を考えれば、いちばん身近な「文章読本」といっていえなくもないのだから、どうでもいいというわけにはいかない。

エイズ並みに蔓延しつつある病的表現を、私はこう名づけた。

<「としている」症候群>

症例1

患者名 每日新聞夕刊

発生時期 昭和58年5月13日

主訴 (見出し) <口事件「検察デタラメ」政府首脳発言／野党「介入」と一斉に反発>

症状 〈新自連の田島国対委員長は「行政府の司法権への介入は問題であり当然追及されなければならない」としている〉（傍線担当医）
 所見 ナゼ「と述べた」「と語った」デハイケナイノカ。

.....

症例9

患者名 每日新聞夕刊
 発生時期 昭和61年12月8日
 主訴 〈「容疑者逮捕」と報道／支店長誘拐〉
 症状 〈同放送はこの情報を現地の村（バランガイ）の役人から得た、としている。CIS当局はこの事件について「聞いていない」としている。〉
 所見 治療法、ナシ。

患者のほとんどが毎日新聞であったことは偶然にすぎない。他紙についても、ほぼ同数の感染者が存在するものと思われる。

江國さんはたぶん毎日新聞を購読していたにちがいない。しかし、他紙も同様く「としている」症候群>に罹患しているとの指摘はほぼまちがいではない。

動詞意向形？！

「としている」は、詳しいことはしらないが、動詞意向形といわれるものらしい。たとえば、「○○ようとしている」は「もうすぐ○○する」、「今○○するところだ」というように使われる。つまり、「ある変化に向かっている状態」、「変化が始まったり終わったりする直前の状態」であるときに使われるという。

「コロナ禍が終息を告げ、ポストコロナの新たな時代が始まろうとしている。」とか、「個人ではじめたちっぽけな会社が、今では日本を代表する企業になろうとしている。」などなど。

江國さんが指摘したのはもう40年も前のことになる。そこで、現在はどうなっているか、手元の新聞で探してみた。ところが以外にも<「としている」症候群>患者はあまり見当たらない。それでも皆無ではなく、記事によっては以下ののような発症例も見られた。

患者名 日本経済新聞朝刊
 発生時期 令和5年2月18日
 主訴 〈世界の半導体装置 減速〉

症状	〈「規制は前工程が中心だが、規制が入れば生産が徐々に減る可能性があり注意深く動向をみたい」（同社） <u>としている</u> 。〉
所見	ナゼ「と述べた」「と語った」デハイケナイノカ。

患者名	読売新聞朝刊
発生時期	令和5年2月23日
主訴	〈トヨタ・ホンダ満額回答〉
症状	〈要求額にはベースアップ（ペア）に相当する賃金改善分や定期昇給分を含む。組合側は「過去20年で最も高い水準」としていた。〉
所見	ナゼ「と述べた」「と語った」デハイケナイノカ。

患者の言い分

報道で「としている」を使うにはそれなりの理由があるという。やはり問題が起きた場合は、両者の言い分を聞くべきであろう。

新聞のように紙面が限られる場合、文章をなるべく簡潔に、分かりやすく書くためには、「～と述べている」、「～と語っている」とそのつど書くと、ことばが重複し読みにくいし長くなってしまう。また、取材元や情報源を明かしにくい場合、「～と述べている」、「～と語っている」とすると、情報源がバレてしまうので、あえて、そこは曖昧に表現する。それを英語では“they say” や “it is said” などと表現するという。

ニュースを整理し「要約すると～という内容です」の主旨で「～としています」を使う時もあるが、これは問題にならない用語である。

執筆者の主觀を交えず、第三者的な客観性（ひっくり返せば曖昧にする危険性もあるが）をもたらすこともできるし、場合によっては権威付けも醸し出せるから、官庁などお上のコメントを伝えるには便利な表現である。

しかし、江國さんの<「としている」症候群>が公開されて以来、報道関係ではずいぶん話題になったらしい。それでかどうかわからないが、現在では、使い古された表現として、むしろ避ける傾向にあるともいう。

もちろん、推敲に推敲を重ねて、それでも最後に残ったのが「としている」であれば、一向にかまわないだろう。

[Back](#)

「ことば／文芸」TOPへ戻る

[Home](#)

「ホームページ」表紙へ戻る